私のこれまでの生活と研究

佐　藤　親　次

僕のこれまでの生活と研究のことを少し書いてみたい。

僕は東京医科歯科大学医学部を卒業した。大学時代は学園紛争のために半分くらいしか授業がなかった。そのためか，卒業近くなっても医者になるという実感がなかった。自分の専攻を選ぶにも，内科，外科などでなくて，一番医者らしくない科である精神科の教室を選んだ。一つには内科や外科は，患者さんをまるごとみるということがなくて，例えば心臓や胃や時には細胞まで「部分」みる傾向にあるのが不満だったということもある。だから，人間をその生い立ちから現在の苦楽にいたるまでまるごとみる精神科を選んだともいえる。医学生が専攻を決めるのをみるのはなかなか面白いものである。優秀な---少なくとも本人がそう信じているか，思っている---者は人体の一番高い部分である脳を対象とする脳外科・神経内科か，一番中心部にある心臓を対象とする心臓関係の科を選択するようである。そこで僕は脳外科を選んだ友人には，精神は形而上にあるのだからそれをみる精神科医は脳外科医より優秀なんだと言い張ることもあった。こんな馬鹿を言っているので，精神科医は変人が多いという迷信を普遍化することになるのだろうか。

さて，紛争の影響で僕は留年した記憶もないのに昭和46年の春でなく夏に卒業することになった。入局すると，病棟の患者さんは少なく，教官，先輩と３人で１人の患者さんをみることになる。そこで３人の医者が入れ替わり立ち代わり１人の患者さんをみるわけである。病院で一番忙しいのは実は精神科の患者さんであった。僕はそんな退屈な場所にいるのが嫌で，もう少し多くの患者さんをみたいと思った。卒後２年は大学で研修するという内規を破り，福島県の民間の精神病院に勤務することになった。その頃から，小田晋先生(後に日航機逆噴射事件の精神鑑定で世間的にも有名になった現社会医学系教授)に研究でお世話になることになった。民俗学と精神医学の学際的研究ということで「蛙憑きの２症例」という論文を出した。それから，「あるこけし工人とその作品の変化」を表現病理学の一環として発表した。こけし工人とは日本民俗学でも主要な研究対象である木地師のながれをくむ人々である。この工人のつくるこけしの顔が作者と似た表情を示して変わっていくのが観察された。分裂病者は理由もないのに笑っている様な顔つきを示したり，おかしいことがあっても無表情のままであったりする。そうした症状が作品に認められたのである。この時は調査のために，伝統こけしで有名な遠刈田，鳴子などの温泉地をまわった。途中の山中で食べた蕎麦粉100％の素朴というか原始的な味が，荒とした出羽山々とともに忘れられない。患者さんを理解するためにはその成育地にまで足を運び，そこの風土をも体験することが必要であることを僕は実感した。

昭和50年春ごろより東京と福島県郡山を週１回往復するようになった。まだ高速道路が宇都宮ま

でしかなかった時代だった。夜中の2時頃，阿武隈山塊の中を車を走らせていると，見えるのは星だけである。ある時突然空から星が滑り落ちた。その時はじめて流星をみた僕は星が降るものであることを認識させられた。「銀河鉄道の夜」そのままの光景だった。

昭和51年には練馬区のベット数800の大精神病院に勤務することになった。その頃，住まいは文京区の東洋大学の近くの白山神社の敷地内の古い木造住宅であった。家族は女房とシャム猫(名はJasper)とヒマラヤン(名はRama)の4人家族である。Jasperの名づけ親は独協医学の精神科教授，Ramaの方は小田教授とどちらの猫も僕より立派な親をもっていた。ある時，田舎のお爺さんがJasperを見て，何という動物かと尋ねるので，つい僕は「豹の子供です」と答えた。するとお爺さんは「豹の子供なのに斑点模様が無いのか」ときいてくる。僕は，「子供の「豹」には斑点が無くて成長すると斑点ができてくるんです」と答えた。お爺さんは「なるほど」と深くうなづいていた。おそらく，彼は死ぬまで誤った豹のイメージを抱き続けたことであろう。

猫の話で想いだしたことがある。ある青年のことである。彼は，新宿の花園神社で四つ脚動物の格好をして通行人に襲いかかり，数人の警察官によってようやく生け捕りにされた。僕が彼を治療することになった。病棟でも時々，四つん這いになって唸りはじめ，白目をむいて，舌をダラーと垂らし，涎を流す猛獣の状態になった。人が近づくと飛びかかろうとする。脳腫瘍か，癲癇か，ナルコレプシーか，ヒステリーか，詐病か，いろいろな病気が疑われた。治療も大変で，獣医さんかサーカスの調教師に頼もうかと言った冗談がでるほどであった。ある夜，彼の兄弟が病院にやってきて強引に院外に連れだしてしまった。拝み屋(祈祷師)に御祓いして貰うためだという。僕はとっさに昔，東北地方で起こった「狐つき」の殺人事件のことを思い浮かべた。「狐つき」状態になったものが，その狐をたたき出そうとする村人に殺されたのである。深夜2時に連絡を受けて，僕は御祓い現場に直行した。現場はアパートの一室で，15歳位の少女(御祓い師か霊能者で神憑りの状態で小刻みに震えていた)，その母親，二人の兄弟が取り囲む円(数本の蝋燭と縄から成る)の中(結界)で，患者は四つん這いになって唸っていた。僕が入っていったのを見て，彼は，「あんたは僕を直せないじゃないか！」とクラウチングスタイルで飛びかかろうとした。このときの情景は，キリストとアスクレピウスを奉る神官達との治療比べの挿話を思い起こさせるものであった。僕は，キリストとは違い，噛み殺されるのが恐くて退散した。この点が単なる医者と教祖様との違いの一つである。翌日，彼は帰院し，女性の治療者によって，軽快した。野性の猛獣が家畜化したともいえる。彼には父に虐待され，母に捨てられるという悲惨な生い立ちがあった。彼の猫への変身は僕に「虎の皮」ではなく論文「猫男の一例」を残してくれた。

こんなことから，信仰と精神障害に興味を持つようになり，それに関係する症状のある患者さんについてはとくに詳細，綿密にカルテを記載していた。そのため，医学博士号が急に必要となった昭和57年に学位論文である「現代日本における精神障害者の宗教的病態について」を短期間でまとめることができた。これも，元はといえば猫男君のおかげかも知れない。

昭和58年に，本学社会医学系精神保健グループ講師として赴任した。こちらにきてからも，今度は病者群でなく一般信者において信仰が精神面に如何なる影響をもたらすかをみるため，一般住民

を対照群としてある新興宗教信者群を調査した。その結果，男性の高齢者にとっては信仰あるということが精神的に好ましい要因となることがわかった。(Depression in Members of a New Religious Sect in Japan)。

高齢者のQuolity of Lifeと信仰との関係をさらに研究したいと思っている。

以下，最近の研究状況を箇条的にお話する。

1）わが国は急激な高齢化にあり，痴呆をはじめ老人の精神保健について調査研究を進めている。一昨年，茨城県下の在宅老人とその家族の精神保健調査をした，その膨大なデータの解析が残っている。

特別養護老人ホーム入居者の精神保健調査。

2）ニオイと精神保健との関係について研究中である。1)と関連して，痴呆の早期発見と痴呆患者のQLの向上のためのニオイの効果研究。

3）化粧などと精神保健の関係。

4）精神保健からみた「昭和天皇の死」。

5）スポーツと精神保健。

6）精神障害犯罪者の犯罪心理学的調査(200の司法精神鑑定例を用いて)。

7）精神保健からみての新たな女性学の構築。

8）不登校(登校拒否)児童へのキャンプ療法の試み。

9）喫煙行動と抑うつとの関係。

学外の業務としては，県下保健所の嘱託医(老人相談事業)，市の老健施設の入所判定委員，県の精神保健審査委員。

学内の臨床として水曜日午前中附属病院外来で診療内科的外来担当(Tel 3593)。

僕は，環境とくに人間そのものがつくり出す環境が人々にもたらす精神的影響に興味があり，また学際的研究を希望しています。環境科学の他の分野との連携ができれば幸いだと思っています。精神保健は間口が広いのでいろいろな可能性があります。環境科学に来て，2年目です。よろしくお願いします。